

# ライブラリー情報

No.35 Library Information December 2009 愛知江南短期大学図書委員会 発行

---

特集 — わたしの おすすめ映画 —

## 目次

一人で見る？みんなで見る？映画の部屋へどうぞ！	/ 図書館長
僕のイチオン映画 江南駅西のレトロな商店街がああ映画のロケ地とは！	/ 皆 はらから
いまを生きる	/ 西東生
『Lesson!』で熱くなる？踊ってみる？	/ 小師石 良磨
『HACHI 約束の犬』	/ Harurin
メディアミックス☆萌えの雄「涼宮ハルヒの憂鬱」	/ 晴々 快
ただ生き続けるという意志 — 『活きる』 —	/ Sheng Chaitian

映 画 : 鑑賞者数ランキング (平成21年11月30日現在)

統 計 : 貸出統計・AVルーム利用統計 (平成21年11月30日現在)

---

一人で見る？ みんなで見る？ 映画の部屋へどうぞ！

図書館長

「ライブラリー情報 No.35」は、映画特集です。先生方がそれぞれの「一押し映画」を紹介します。このペンネームはどなた？ ヒントが隠れていますから、想像しながら読むとおもしろいですよ。

「図書館長」は映画館に囲まれた商店街に育ったので、映画が大好きです。幼児の頃から、黒澤明監督の映画は全て見させられていました。遊びは『椿三十郎』ごっこです。

月末になると余った無料チケットをもらうので、「今日しかない」と、一日に何館もはしごをしました。午前中は松竹の『秋刀魚の味』、お昼を食べに帰って、午後は日活の吉永小百合『キューポラのある街』という具合です。

小学生ながら友達に引っ張られて、洋画専門館にもよく行きました。例えば、オードリー・ヘップバーンの『尼僧物語』。美しい尼僧が、最後の場面で被り物を取り、僧院を出ていきます。反ナチス抵抗運動に加わるためでした。子どもの私には行き先は理解できなかったけれども、ヘップバーンは凜としてきれいでした。同じく反ナチスの映画が『菩提樹』。これは後に『サウンド オブ ミュージック』になったトラップ一家の物語です。戦争も、ナチスの意味もわからず、美しい女優さんと歌声に引か

れていました。しかし、主人公の行動の意味はわからなくても、「なぜ？」と、心に引っかかり、ずっとずっと後の解る日まで残るのです。それでいいですね。

現在はもちろんハンサムな男優です。お薦めは『ガタカ』のジュード・ロー。「すごいハンサムだって評判だよ」の噂でハンサム好き仲間と見たのですが、これが近未来の、出産を遺伝子操作で行う超差別世界の話。あり得ることと、ふるえました。しかし噂に違わぬハンサム！必見です。

日本の女優では宮沢りえ、お薦めは井上ひさし原作の『父と暮らせば』。きれいなだけでなく、演技力に感心しました。題名の「父」は、原爆で亡くなったのですが、娘を心配して幽霊となって出てくるのです。父と娘のやり取りが何ともユーモラス。悲しくも暖かさがにじむ演技が見事でした。監督は『雨月物語』の世界をイメージしたそうですが、私はとても納得しました。奥が深い映画です。

若い男優ではリンク・ラーキン。お薦めの『ヘアスプレー』は、江南短大・学内ランキングでもしっかり 16 位に入っていますね。見終わったら、AVルームを踊りながら出ることになるかも。皆さんもぜひ見に来てください。

## 僕のイチオシ映画

江南駅西のレトロな商店街があの映画のロケ地とは！

皆 はらから

『僕のイチオシ映画』といっても、今年は 2 本の邦画しか見ていない。今年の初めに見た妻夫木聡主演の『感染列島』と夏休みに上映された唐沢寿明主演の『20 世紀少年＜最終章＞—ぼくらの旗—』である。まずは、『感染列島』の所見から。この映画は未知のウイルスのバイオハザードによるパニックを描いたものである。のっけから衝撃的な映像で始まり、これは、と思わせるのであるが、そのあとのストーリーには、新鮮さ・緻密さが欠けており、すこし期待はずれであった。これを見た時点では、新型インフルエンザはまだ、流行の兆しがあった程度で、今のようなパンデミック状態ではなかった。もし今、この映画が地上波で放送されると、新型インフルエンザの恐怖が増幅されるかも。。。と気になる。また、この映画の中で、気になったところが。。。『官僚たちの夏』で主演の佐藤浩市が、この映画では友情出演で前半のさわりに、医者として患者に接触し、感染、血へどを吐きながら熱演している。ところが、同じように感染した壇れいは、吐血することなく、きれいな顔で涙をひとすじ流しながらウイルスに犯されていくのは何故なのか？（やはり、宝塚出身の美しい女優に血へどを流させるわけにいかないのであろう。）主演の妻夫木聡にいたってはあの男前の素顔のままで感染すらないのは何故？（主演だから当然か）『天地人』での軽めの熱演が妻夫木の限界？また後半、マングローブの森を伐採し、生態系を破壊したエビ養殖によってウイルスを蔓延させたかのシーンがあるが、そのとき「そんなアホなア」と口に出かけた。冷血動物（エビ）に感染するウイルスがヒトに？？？（素人はだませても、わしはだまされんゾ）結局は、空飛ぶほ乳類が感染源と獣医師の藤竜也によって判明するのであるが、（なんだかなア）。ということで、『感染列島』は『僕のイチオシ』ではありませんが、ウイルスについて「学んでみようという気」になる作品でした。食物栄養学の方々にはオススメかも？

やっと本論、僕のイチオシ映画です。「そうだよ、ぼくだよ、ぼくが“ともだち”だよ」、と脳裡に焼き付くキャッチコピー。この『20 世紀少年』は 1999 年から 2006 年まで週間ビッグコミックスピリッツで連載された浦沢直樹の漫画が映画化されたものであり、2008 年に第一章が公開され、第二章、

そして今回の最終章からなる3部作である。唐沢寿明が演ずる主人公のケンジ（遠藤健児）は1959年生まれであり、僕と同じ年である。また、作者の浦沢直樹も1960年の1月生まれであるから、同級生である。だから、この映画の時代背景は僕の少年時代と重なり、その時代の少年たちに非常に強いインパクトを与えた1970年開催の大阪万博が主たる背景となっている。僕は当時大阪市の小学校5年生で、遠足も含めて6回万博に行った。その35年後に愛知万博（愛・地球博）に4回も足を運ぶことになったが、そのインパクトは大阪万博にまったく及ばない。その時代に存在したものの多くがそのまま、またはパロディ化されて登場するのが興味深い。例えば、双子がヤン坊・マー坊だったり、三波春夫の「こんにちは、こんにちは、世界の国から」が春波夫の「ハロー、ハロー、エブリバディ」になったり、ウルトラマンの科学特捜隊が地球防衛軍として登場している。少年時代のケンジが駄菓子屋から盗んだものは、その科学特捜隊のトランシーバーのおもちゃである。作者は水木しげるや藤子・不二雄の作品からの影響をかなり受けている様で、エロイムエッサイムの『悪魔くん』や『忍者ハットリくん』が登場する。これらの作品のモノクロ実写版を見た世代には格別の印象があると思う。このように少年時代にうけた文化、特にサブカルチャーから与えられる強いインパクトは大人になっても忘れず、残像として無意識に人の考え方や生き方に与える影響はかなり大きい。だから、エンドロール後のラスト10分では、「フクベイ」から「カツマタ」そして「ともだち」へと、どのように繋がっていくのかを描き出している。少年時代にうける他者（友人）からの、何気ない言葉や態度などが、本人の生き方に大きくかかわり、「ともだち」という悲しい人間を生み出してしまった。この映画は単なる娯楽作品ではなく、「教育的な映画」なの？と感じるものであった。現代幼児学科の学生にはオススメかも？

ところで、知っていましたか？ケンジの実家の遠藤酒店は、実は、江南駅の西側にある愛栄通り商店街と交差する新町通り商店街の川松酒店がロケ現場であったことを。このレトロな商店街は昭和の雰囲気があり、同じ通りの衣料品店もまた、嵐主演の『黄色い涙』の食堂として使われていた。現在、ふれあいプラザとなっているレトロな大衆食堂「さかえや」でこれら映画のロケ風景写真が展示されている。また、愛栄通り商店街には営業していないが、昔の銭湯もそのまま残っている。今の雰囲気を生かして、この商店街が江南の名所にならないのだろうかと思いながら、僕は毎朝、この通りを自転車でかけぬけている。



今、昭和に流行った『カムイ外伝』や『宇宙戦艦ヤマト』が劇場映画として復活しているが、これらは何を物語るのだろう。創造力の欠落だろうか、昭和への郷愁なのだろうか。大衆はこの時代にあった何を求めるのだろう。僕の結論は、「大衆は人と人との心をつなぐ映画を求めるのだろう」である。「いやあ、映画ってほんとうにいいもんですねー」  
「それでは、さよなら、さよなら、さよなら」



## いまを生きる

西東生 (サイトウセイ)

1980年代に私が中学生であった頃、学内の映画鑑賞会で『風の谷のナウシカ』を見ました。ナウシカを見て、当時何を感じたのか、もう確かな記憶は残っていません。ただ私自身、たいへん興奮し、えらく感動をしたこと、それは多くの生徒たちも同様で、みんながその話に引き込まれていたのは覚えています。そして何より記憶に残っているのは、学年主任のS先生が、上映の後に、「ぜんぜん内容が理解できなかった」と感想を漏らしたことでした。私は、何でも知っていて、難しいことまで理解できていると思っていた絶対的な存在である先生が（今は、そんな幻想は抱いていませんが・・・）、私の理解できていることを理解できないという事実には驚きました。しかし時を重ねて今、自分の理解できないアニメーションが増えていることに気づき、あの時の先生の戸惑いがわかります。

私が高校、大学時代に愛読していた沢木耕太郎は、あるルポルタージュのあとがきで次のように記しています。

年齢が作品にとって特別な意味を持つことは、あるいはないのかもしれない。しかし、五年前であったら、これは山口二矢だけの、透明なガラス細工のような物語になっていただろう。少なくとも、浅沼稻次郎の、低いくぐもった声が私に届くことはなかったに違いない。そして、これが五年後であったなら、二矢の声はついに私に聴き取りがたいものになっていたかもしれないのだ。

二十代の終盤にさしかかっていた沢木が、その年齢だったからこそ、若い人の声も、年老いた人の声も理解することが出来たのではないかと振り返った文章です。このあとがきを得て、沢木のその作品は、より一層、私に多くのものを伝えてくれました。現在の私は、惜しくも本に書かれた細かいことを記憶していません。しかし、激動の時代に、老いも若きもそれぞれが必死に生きていたのだという印象は深く残りました。

引用したあとがきは、作家の立場からの視点であり、作品を読む立場からのものではありませんが、作品を理解する・楽しむということにもあてはまるでしょう。つまり、人生のどのタイミングで、どのような本・映画・音楽そして仲間たちに出会うかは、その内容を受け入れる上で大きな影響（制限）を与えうるということです。

自分が何者であるのか、何をすべきなのかに大いに悩む若い時期に、追い打ちをかけるように「今しかできないことをやれ」などと学生の皆さんへ説教するのは酷なことかもしれません。出会った作品を本当に理解できたのか、よくできなかったかは、後になってようやくわかる場合も多いのです。今の自分に何がふさわしいかわかるなんて、滅多にないからです。

しかしそれでもなお、あえて「今しかできないことをやれ」と言いたいのです。よりよい自分となるためには、その時その時なりに、自分の感性を信じて多くの事柄に挑戦し、取り組んでいくことが大切だと思います。昨日も大事、明日も大事だけど、何よりも今、この時に何を選び取るかが問題です。それが後に振り返った時、最良のタイミングだったと思えるように努力するのです。

皆さんに、まさに今、出会って欲しい映像作品はたくさんあります。それに会うため、世間一般に名品と呼ばれているものから、まずは試してみるといいでしょう。身近な人の助言もよいきっかけとなります。私の学生時代に見た作品では、『バタアシ金魚』、『グリーンカード』、『いまを生きる』が印象に残っています。ぜひ素晴らしい作品たちと出会い、さらに学生生活が豊かになることを願っています。

## 『Lesson!』で熱くなる？踊ってみる？

おいしい しょうま  
小師石 良磨 *Oshiishi Ryoma*

これは、ニューヨークのスラム街を舞台に、ダンスを通して高校生の不良少年少女たちが成長していく実話を基にした映画です。

……こう聞くと、どうせ、みんなでダンスしながら協力して、時にぶつかりながらも、最後はハッピーエンドで終わる予定調和的なのというか、熱血か何かを売りにしたというか、そんな形で人々の感動を誘うことを狙った映画なんでしょ？と私のようなひねくれ者は感じるかもしれない。とりわけ、私の場合、実話を基にドラマ化・映画化されたものと言われて思い浮かぶのが「スクール・ウォーズ」なので、なおさら熱血ものというイメージを抱いてしまう。

実を言うと、そうした評価も、あながち間違いいではない。「実在の社交ダンサー、ピエール・デュレインの実話を基にした真実の物語！」と銘打たれたこの映画では、劣等性の烙印を押され落ちこぼれだったハイスクールの子どもたちが、社交ダンスを通して成長していく“熱い”物語が展開されているからだ。観ようによっては、熱血ものとも言えるだろうし、実話ならではの迫力や面白さもこの映画には感じられる。

しかし、私がこの映画に興味を持ったポイントは別にある。それは、デュレインの高校生たちに対する接し方だ。ヒップホップ (HIP HOP) しか踊らない高校生らに対して、ピエールは社交ダンスを教えてその魅力を伝えようとする。とはいえ、ピエールは決して社交ダンスをその子たちに無理矢理教え込もうとはしない。その子らがヒップ・ホップを通して体現している「文化 (culture)」を否定せず、むしろ、敬意を払って接している。その証拠に、ピエールの社交ダンスに反発してこれみよがしにヒップ・ホップを目の前で踊りだす高校生たちに、彼は激昂することなく、かといって絶望して落胆することもなく、一人の少年が発した言葉を受け止めた上で、翌日、自ら踊ってみることで社交ダンスの面白さに気づかせるのだ。

デュレインは社交ダンスの単なる踊り手ではない。社交ダンスに不可欠なマナーを日常生活の場でも実践し習慣化することで自分なりの「文化」を身にまとった人物である。そんな彼の人間性に裏打ちされた教師としての態度は、カリスマ的なリーダーシップといったものでもない。この映画の原題は“*Take the Lead* (「先導する」といった意味)”というのだが、彼はスーパーマンのように超越的な力を駆使して高校生たちを引っ張って導いているわけではない。相手が誰であろうと、まさにジェントルマン (gentleman) として接し、時に励まし、時に諭し、そして時に悩む、一人の等身大の人間として、彼・彼女らと共に歩む存在なのだ。

このような影響をさまざまな形で受け止めていった高校生たちに変化が生じるも、当然といえば当然だろう。今まで成績や素行の悪さで周囲の人や教師から人間性そのものを否定され続けてきた彼・彼女たちは、自らの能力を最大限に開花させ、自分たちの社交ダンスを創り上げていく。その踊りは、まさに見事の一言である。(ちなみに、デュレイン役のアントニオ・バンデラスの社交ダンスも素晴らしい。シーンが少ないのが残念だが…)

そして、この映画を見終わったら、何か急に踊りたくなる人もいるかもしれない。実際、私自身、この映画を最初に観たのは数年前のアメリカ出張の帰りの機内だったのだが、座席がエコノミーでなければ踊り出していたかもしれない (その後、危険人物としてキャビン・アテンダントに隔離されただろうし、ビジネスやファーストクラスだったら踊っても良いということでもないが)。

単に純粹に、ダンスを通じた青春映画としても鑑賞できる映画であるが、アメリカにおける移民の問題やスラム街での家庭の貧困状況などの知識をある程度知っていると、深く考えさせられながら観ることもできる映画である。とにもかくにも、一度ご覧あれ。

## 『 HACHI / 約束の犬 』

Harurin

ハチ！！ ハチィ〜 ハチ？ ハチ♡… リチャード・ギア扮する大学教授のパーカーがこの名前を何度映画の中で呼びかけ、口ずさみ、話しかけるだろう。「ハチ」と呼ぶ彼の言葉とそれに応える秋田犬のハチの表情やしぐさが織り成すコミュニケーションの豊かさに、つい字幕を読むことを忘れ、見入り、聞き入ってしまった（決して字幕無しでも理解できるのよ！などと、根拠のない自慢をしているわけではありません）。この映画は、ノンバーバル・コミュニケーションの素晴らしさを私たちにもう一度教えてくれる。言葉で自らの意思を人に伝える大切さ、コミュニケーションツールとしての言葉の重要性を私たちは幼い頃から教えられてきた。気持ちをわかってもらいたいなら、言葉できちんと伝えなさいと。でも、本当にそうだろうか？言葉では伝えきれない思いが、表情に、声の調子に、沈黙ににじみ出て、その思いを含めて、相手の気持ちを思いやる、察するということが、とりわけ日本社会においては、コミュニケーションの潤滑油となっているように感じられる。

映画の冒頭、出張帰りのパーカーはベッドリッジ駅で迷子の子犬「ハチ」に遭遇し、家に連れ帰る。最初は犬を飼うことに反対していた妻も、パーカーとハチの一途で優しさにあふれた相思相愛ぶりに、次第にハチを家族として受け入れていくようになる。毎朝ベッドリッジ駅まで、パーカーと一緒に出かけ、見送るハチ。途中のデリカテッセンの夫婦やホットドッグスタンドのマスターへのご挨拶も忘れない。夕方5時には駅前でパーカーの帰りを待つ。パーカーが扉を開けて「ハチ」と呼ぶまでの何分間かはハチにとって至福の時間であろう。そうした穏やかで、愛情に満ちた何年かの日々が過ぎた後、突然パーカーが大学で倒れ、帰らぬ人となる。その日の朝、何かを感じたハチは何とかしてパーカーを大学に行かせまいとする。ボールで遊ぼうとしつこく誘ったり、行く手をふさいだり…しかしハチの必死な思いは伝わらず、その日の駅での見送りが、ハチとパーカーの永遠の別れになった。あの時、ハチがもし言葉を話せたら…「行かないで」「今日は休んでほしい」。一番伝えなかった言葉が伝わらないハチの思いはどんなに大きく行き場のないものであったろう。私たちは言葉と言葉以外の両方のコミュニケーションを持つ唯一の生き物と言える。相手も自分も生きていることが楽しいと思えるようなコミュニケーションができるといいな、と私自身いつも願っている。（実際は相手をおこらせ、自分も落ち込むというパターンに反省の日々ですが…）

パーカーとの永遠の別れの日から、ハチは、駅で一日中パーカーを待つ生活を何年も送る。雪の日も雨の日も、真夏の日も…毛皮は泥で汚れ、やせ細り、それでも朝夕の時間には、シャンと背を伸ばし改札の扉をじっと見つめるハチ。パーカーの家族や友人が連れ戻そうとするが、そのハチの姿に首を振り、そっと帰っていく。ハチは亡くなるまでの何年か幸せだったのだろうか？いろいろな見方があるだろう。可哀想と感じる方もいるだろう。ただ、生き物は（犬までか、カエルまでか、ワラジムシまでを含むかにもよりますが）誰からも、一度も一途に愛されたことなく生きていくことはむずかしいけれど、たった一人にでも一途に愛された経験があるならば、それが現実には亡く、心に存在しているものであったとしても、生きていけるように思う。多分ハチは幸せだったんだろう。誰からもパーカーを待ち続けることを強制されず、誰からも自らの意志でパーカーを待ち続けることを止めさせられなかったのだから。

## メディアミックス☆萌えの雄「涼宮ハルヒの憂鬱」

晴々 快

「涼宮ハルヒの憂鬱」はシリーズ9冊で累計500万部を超える売上を記録したライトノベル界の、えーっと、なんというか、まあ、とにかくとんでもなく売れた本だということである。

ライトノベル、略称ラノベ、というのは、軽い小説、というような意味なんだろうけれど、実際内容も軽く、本そのものも軽く、ざっと2時間もあれば1冊読めるようなもので、「好きな本は？」と聞かれて「ラノベです」とは答えにくいような、そんな類の本である。そういうものの中でバカ売れしたのが涼宮ハルヒとその仲間たちが繰り広げる物語なのである。

アニメ化もされ、ファンが多いのかどうかは、よく知らないのだが、とにかく凄いらしい。YouTubeでも検索してみれば、人気のほどがわかるというものだ。ゲームも何種類か売り出されており、スピンアウトした作品もあり、映画も公開される予定である。

この物語では、もちろん涼宮ハルヒが主人公だ。涼宮ハルヒ改め、ハルにゃんは、いつも憂鬱を感じている少女なのである。なぜ憂鬱なのかというと、ハルにゃんは少し変わっているからである。つまり、ハルにゃんは入学早々の自己紹介で「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところに来なさい。」と宣言するような、少し、というかそこそこに不憫な感じの子なのである。そのようなものを望んでいるからには、普通の日々など憂鬱そのものであるはずだ。この憂鬱を取り払うべく、ハルにゃんを中心に宇宙人、未来人、超能力者が集う「世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団」、略称SOS団が、なんというか、ドタバタ劇のようなことを繰り広げるというわけだ。

SOS団は、女子3人、男子2人で構成されている。未来人である朝比奈みくるは、唯一の高校二年生団員で、その、あれだ、なんというか、簡単に言えば、超萌え系だ。詳しいことはここでは述べないので、知らない人はググってみてくれ。もう一人の女子団員は宇宙人という設定なのだろうが、その実体は、えーっと、情報統合思念体の対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース、という長門有希だ。どういうことかよくわからないかもしれないが、大丈夫だ。誰にもわからん。この少女も萌え系だ。しかも、めがねっ娘だ。いろいろな意味で残念なことに、私は長門派だ。男子の一人はさわやか系イケメンの小泉一樹だ。超能力者という設定だが、どうでもいいので詳しくは原作かDVDでも見てくれ。

団長であるハルにゃんはもっと凄いことになっている。彼女は、ただ憂鬱なだけでなく、そのような憂鬱な世界を改変する能力をもっている、神のような存在だ。ハルにゃんの気まぐれで世界がいろいろとおかしなことになり、それをSOS団が修正して、というようなことが話の軸となっている。最後の一人であるキョンは本名が設定されていない普通の高校男子一年生として登場し、どうもハルにゃんから好かれているようであるが、そのようなことはふわっとしかわからない作りになっている。当然だ。物語が彼のモノログで進行していることから、キョンは、つまり、その、なんだ、はつきりとは書いていないので、そこは察してくれ。

2009年の春に2006年度放送のアニメシリーズに新作がいくつか追加され、「改めて放送」という形で新作シリーズが放送された。この中の新作「エンドレスエイト」はある意味で画期的な作りになっている。このエピソードの原作は「涼宮ハルヒの暴走」に収録された短編であるが、ハルにゃんが夏休みにやり残したことがある、とどこかで、なんとなく思っているためかどうかはわからないが、休みが終わることなく、8月の終わりの数週間がひたすら繰り返される、という内容である。人々はまったくそのことに気付いていないが、SOS団の団員たちは徐々に気付いていく。ちなみに私も4週間ほど気付かなかった。何が心残りだったか、そして何が画期的なのかはここでは書けない。なぜかって？まあ、なんだ、こういう文章だから、な、そこは察してくれ。

そうそう、大事なことを忘れていた。ハルにゃんも、萌え系だ。安心していいぞ。

原作、アニメDVD、ゲーム、スピンアウト、映画：「涼宮ハルヒ」でググれば大量の情報あり  
ググる：<http://www.google.com/>

Sheng Chaitian

権力にとりつかれた個人の妄執が多くの人の運命を狂わせてしまうことがある。自らのプランのみに固執する権力者は、反対者を追い落とすことに血道をあげ、周囲にイエスマンを集めることに喜びを見出す。その行動原理は自らの軌跡の正統化、無謬神話の構築であり、その中で呻吟する庶民の姿はそもそも彼等の眼中にはない。近代中国の歴史は権力闘争とそれによる政治方針の急転換に庶民が振り回され続ける過程でもあった。そしてその中でも最も極端な事象がプロレタリア文化大革命であり、それが繰り返し映画化されるのも、「文革」が中国人に与えた深い傷跡を考えるならば決して意外なことではない。

『活きる』では、国共内戦、大躍進、文化大革命といった激しい社会の変化の中で、あるひとつの家族がたどった運命が描き出される。主人公の富貴（フークイ）の周りでは、『活きる』というタイトルとは裏腹の死が頻発する。富貴の父は賭博に狂い全財産を失った富貴に怒って憤死し、さいころ賭博の相手だった龍二は、富貴から奪い取った財産を所有していたのが原因で人民の敵として射殺される。富貴の息子の有慶は寝不足の日に富貴に学校に連れて行かれ、学校の隅で昼寝をしているところに車が突っ込んできて死亡する。富貴がその日息子を無理に学校に行かせたのは、そうすることが共産党の方針に沿うと判断したためだった。富貴の娘も、ベテラン医師が誰一人いなかった病院で、出産時に適切な治療が受けられず死亡する。文化大革命は全ての社会秩序の転倒を正当化し、その結果医師は病院から追放され医学生のみで治療がなされる状態になっていた。

どうしようもなく暗くなってもおかしくないこの映画は、しかし不思議なテンポの良さと奇妙な明るさに満ちている。国民党軍に従軍して死体の山に囲まれた時も、すぐ近くで知人が射殺された時も、古い友人が粛清される前に別れの挨拶に来る時も、富貴はひたすら生きることを考え、生きて行こうと語り続ける。生き続けることそれ自体を追い求め続ける。

権限を持つ人々が自分のプライドと思い込みに固執し続ける一方で、多くの力弱き人々がそれに振り回され、時に人生を狂わされてゆく。そのような事象は世界史上幾度も繰り返されてきたのであろうし、私たちの身近でもそれに類する出来事は日々起きている。そのような事態に対抗する手段は容易に見つからないけれども、どんなに絶望的な状況でも、ただひたすらに生き抜いて全てを見つめ続けてゆくことだけが、私たちに今必要なことなのかもしれない。この映画が描いているのは、一言でいえば、ただ生き続けてゆく意志の強さと尊さなのだと思う。

(1994年・中国、張芸謀監督、原題『活着』)



2009年4月 ～ 11月末 DVD鑑賞者数ランキング

タイトル	利用者数	順位
アメトーク	105	1
パコと魔法の絵本	58	2
容疑者 X の献身	51	3
Dear Friends	41	4
おくりびと	38	5
花より男子ファイナル	35	6
チャイルド・プレイ	31	7
EXILE LIVE TOUR 2004	31	7
マリアムおじさんの不思議なおもちや屋	28	8
内村プロデュース	23	9
バイオハザードⅢ	22	10
ラブ・コン	21	11
ベンジャミン・バトン 数奇な人生	21	11
ハムナプトラ 3	20	12
バイオハザードⅡ アポカリプス	20	12
チャイルド・プレイ 2	19	13
クローズZERO	19	13
プロペラを止めた、僕の声を聞くために	19	13
赤い糸	19	13
ミラーズ	18	14
呪怨	17	15
砂時計	17	15
最高の人生の見つけ方	14	16
ヘアスプレー	14	16
ジュノ 特別編	14	16
チャーリーとチョコレート工場	13	17
バイオハザード	13	17
インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア	12	18
ティム・バートンのコープスブライド	12	18
ハイスクール・ミュージカル	12	18
モンスターズ・インク	11	19
サイレントヒル	11	19
いのちの食べかた our daily bread	11	19
バトル・ロワイヤル	10	20
火垂るの墓	10	20
ハリー・ポッターと炎のゴブレット	10	20
親指さがし	10	20
木更津キャッツアイ	9	21
レミーのおいしいレストラン	9	21
魔法にかけられて	9	21
アダムス・ファミリー 2	9	21
百万円と苦虫女	9	21
きみに読む物語	9	21
マンマ・ミーア!	9	21

タイトル	利用者数	順位
ふしぎの国のアリス	8	22
ライオンキング	8	22
魔女の宅急便	8	22
ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団	8	22
ホーム・アローン	7	23
ルパン三世 カリオストロの城	7	23
THE 有頂天ホテル	7	23
ダークナイト	7	23
美女と野獣	6	24
ブレア・ウィッチ・プロジェクト	6	24
ピーターパン 2	6	24
ピノッキオ 実写版	6	24
トロイ	6	24
ボイス	6	24
初恋のきた道	5	25
千と千尋の神隠し	5	25
クイーン オブ バンパイア	5	25
リロ アンド スティッチ	5	25
スパイダーマン 3	5	25
舞妓Haaaan!!!	5	25
NANA 2 Standard Edition	5	25
悪魔の棲む家<特別編>	5	25

本学図書館の AV ルームでは、まだ短大の環境に慣れていない 1 年生が、新しいクラスメイトといっしょに映画を見ながら、だんだん仲良くなっていったり、高校生の頃に行けなかったロードショーの映画を新作 DVD で見て共通の話題にしたりと、仲間と一緒に図書館で映画を見ることを、短大に来る楽しみの一つにしているようです。

映画好きの学生には、レンタルショップであまり置いてない名作映画やハリウッド系でない映画を探して卒業までかなりの本数を鑑賞する人もいます。

本の年間貸出冊数は例年、2 年生になると 1 年生の時の 1.5 倍から 2 倍になります。1 年生の頃に DVD をよく見に来ていた学生が、「2 年生になったら忙しくて、DVD を見たいけど、なかなか来られなくなりました。」と言いながら、本を借りたり、図書館でレポートを仕上げにいたりします。そんな姿を見ると、まだこのあいだ入学したばかりだと思っていたのにと、時間がたつのがとても速く感じられます。

(附属図書館司書)

平成21年度 貸出統計（冊数）

学科・専攻・コース	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	合計
建築・インテリアコース 1年			1	1					2
建築・インテリアコース 2年	12			1					13
食彩・調理師コース 1年	5	14	6	13		3	1	5	47
食彩・調理師コース 2年	5	4	9	17		4	7	3	49
食物栄養学専攻 1年	9	8	10	9		1	5	18	60
食物栄養学専攻 2年	18	15	25	31	3	6	11	10	119
現代キャリアコース 1年		2	5				2		9
現代キャリアコース 2年		1	2	2				7	12
国際教育コース 1年									0
国際教育コース 2年	1	2	2	1			1		7
社会福祉学科 1年		2	2				12		16
社会福祉学科 2年	1		1				3	52	57
現代幼児学科第1部 1年	15	10		9	3	14	2	7	60
現代幼児学科第1部 2年	41	199	20	23	32	63	23	23	424
現代幼児学科第3部 1年	2	18	30	16	5	8	12	3	94
現代幼児学科第3部 2年	6		5	2	5	1	3		22
現代幼児学科第3部 3年	5	43		17	2	1	9	4	81
合計	120	318	118	142	50	101	91	132	1072

平成21年度 AVルーム利用統計（利用者数）

学科・専攻・コース	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
建築・インテリアコース 1年		3	1	10			6	6	26
建築・インテリアコース 2年									0
食彩・調理師コース 1年	14	10	7	6		1	5		43
食彩・調理師コース 2年	18	3	1	9			3	1	35
食物栄養学専攻 1年		3							3
食物栄養学専攻 2年	26	2	6			2	13		49
現代キャリアコース 1年				4					4
現代キャリアコース 2年	2			1			4	3	10
国際教育コース 1年			2					2	4
国際教育コース 2年	19	15	16	5	1				56
社会福祉学科 1年		5	7	16					28
社会福祉学科 2年	15	6	11	32			6	3	73
現代幼児学科第1部 1年	5	51	91	76	1	12	30	15	281
現代幼児学科第1部 2年	88	86	105	72	10	1	51	37	450
現代幼児学科第3部 1年	3	16	2	9	4	1	10	1	46
現代幼児学科第3部 2年		2	2		2				6
現代幼児学科第3部 3年	9	5	2	14	8		23	2	63
合計	199	207	253	254	26	17	151	70	1177